

合意形成プロセスと完成した空間デザインの質的事後評価にみる 住民参加型整備事業の課題に関する考察* ー福岡市における参加型13公園を事例としてー

The Issues of Participatory Project from the Relation of Decision Making Process and Design Review in Finished Space -The Case of Participatory thirteen Parks in Fukuoka city-*

柴田 久**・西原敬人***・石橋知也****

By Hisashi SHIBATA**・Takato NISHIHARA***・Tomoya ISHIBASHI****

1. はじめに

(1) 本研究の背景と目的

今日、公共空間整備に対する住民参加の重要性が法制的にも明確化され、利用者である住民の意見を反映させることの意義が広く認識されている。しかし、基礎手続きとして住民参加が定着する一方で、事業推進を第一とし、合意形成自体を目的とした形骸的な参加の存在も既に指摘されている¹⁾。本来、空間や景観のデザインにおける参加の手續的信頼性は、単に説明責任や住民意見の反映という観点からでなく、利用者の意識や行動とともに、成果として生み出される空間や造形がいかにより質的に向上するかを問わなければならない。

本研究では、1) 住民参加型で計画案が作成され、かつ竣工を見た公園整備事業を対象に、設計・計画段階の合意形成プロセスと実際に出来上がった公園の空間デザインとの関連性を把握する。さらに、2) それらの知見を踏まえ、参加型空間整備事業に携わる実務技術者(専門家)に求められる姿勢や今後の課題について検討する。

(2) 先行研究の成果と本研究の位置づけ

参加や合意形成を巡る研究は数多く見られ、土木計画学の他、隣接諸分野においても事例を対象とした「プロセス」に着目したものが多い。本研究に関する先行研究として、阿部らはワークショップ(以降:WS)における合意形成プロセスの明確化および合意形成過程の違いが最終的に出される結論(WSの成果)に与える影響を分析している²⁾。さらに天野らは公園改修WSのデザインプロセスを対象とし、当初のWS実施前の公園計画と参加による公園デザイン案とを比較してその特性について調査・分析を行っている³⁾。また安仁屋らは完了した景観整備に関する事業の評価項目を整理し、事後評価の枠組みを提案するケーススタディを行っており⁴⁾、これに続き後藤らが、特に人々の日常生活に対する効果から

*キーワード: 合意形成, プロセス, デザイン, 事後評価, 参加

**正員, 博士(工学), 福岡大学工学部社会デザイン工学科
(福岡市城南区七隈八丁目19-1)

TEL092-871-6631, hisashi@fukuoka-u.ac.jp)

***正員, 学士(工学), 九州旅客鉄道株式会社

****正員, 修士(工学), 福岡大学工学部社会デザイン工学科

前述した評価手法の有効性を事例検討している⁵⁾。さらに福岡市では景観整備事業における効果の整理分類と利用者及び住民の評価軸抽出を行い、景観整備事業がもたらす効果について事業種別に考察している⁶⁾。

参加の有無にかかわらず、設計・計画プロセスで想定されていた理念や空間利用が整備後の実態や評価と一致しているかは、プロセスの有効性・妥当性を評価するうえで極めて重要な観点といえる。しかし、これら先行研究の有益な成果に対して、複数の市民参加型整備事業を横断的に調査し、それら設計・計画プロセスと事業完了後の空間デザインの質という複眼的観点から参加型デザインの特質と課題について言及したものは未だ少ない。

ここで既に指摘されている空間デザインの課題として、篠原は今後の土木デザインに求められる「職能のコラボレーション」の実践について言及し、設計を担うエンジニアの意識改革とこれを促すコンペ、プロポーザル等の発注制度⁷⁾について指摘している。発注者側である行政のノウハウの蓄積や人材育成についてはすでに指摘されるところであるが⁸⁾、ここでのコラボレーションは異なる専門性を持つ実務者の協働が主に想定されている。これに対し、地域の専門家とも捉えられる住民との協働に関して樋口らは道路拡幅事業を事例に、行政による場作りの必要性や住民に向かい慣れていない専門家の存在等を課題として挙げている⁹⁾。冒頭で述べた形骸的な住民参加への問題意識を踏まえ、本研究ではデザインの質を保持する参加型空間デザインの課題について、今後求められる発注制度への知見抽出を念頭に、住民との合意形成に際する専門家、実務者の姿勢ならびに留意すべき作業について考究することを試みる。

2. 調査・分析手順および事後評価項目について

本研究では、福岡市内において参加の手法を用いて計画され、かつ竣工した13公園¹⁰⁾を対象に、それぞれの立地条件、整備に至る経緯、WSにおける合意形成手法等について、市所有の報告書ならびに記録集をもとに調査を行った。また当時の公園整備を担当した市、区職員へのヒアリングを補完調査として行った。これら調査では各公園の参加を巡るプロセスについて、参加の手續きとして行われた方法や期間、回数や内容等の基礎調査を踏

表-1 デザイン・サーヴェイ、利用実態調査の概要

項目	概要
対象	福岡市参加型13公園
期間 (時間帯)	2005年9月～11月、2006年10～11月(平日:11～18時の6時間、 土日:午前11～18時の2時間(両時間帯とも晴天日))
デザイン サーヴェイ 調査項目	①空間構成(公園内のゾーニング)とその特徴 ②各空間(ゾーン)ごとのつながり ③公園施設の種類の形相 ・パーゴラや遊具等の有無、種類、数、形状(具象性等)、規模、 材質、色相 ・ゴミ箱などの設置・管理状況・花壇の有無、使用状況 ④周辺環境に対する空間的・景観的配慮、関連性の有無 ⑤利用者の安全面に関する対策 ・フェンス等の有無、規模(高さ等)、配置・公園の使用ルール ⑥公園内樹木の有無、種類、状態、管理状況
利用実態 調査項目	①現地で利用者を対象とした聞き取り(利用頻度・目的、満足度) ②トレーシングペーパーを用いた動線、利用空間範囲の把握 ③時間帯別利用人数の集計

またうえで、それらWS等の成果が最終的な公園のデザインやコンセプトに対し、いかなる繋がりや貢献を有したかに着目している。次に、設計図面、整備前の写真を参照し、実際に竣工した13公園のデザイン・サーヴェイおよび住民の利用状況把握を目的とした現地踏査を、利用者・周辺住民へのヒアリングとともに実施した。評価項目として、公園全体の空間構成や周辺環境に対する空間的・景観的配慮の有無、遊具などの施設設置状況とその特徴等を挙げ、さらに公園内における利用者の動線や空間ごとの使われ方など、利用状況に関わる実態を調査した(表-1)。これら完成した空間デザインに関わる調査結果と上記参加プロセスに対する調査結果を比較検討し、デザインとプロセスとの整合性、関連性を考察していく。

3. 13公園の空間的特色と参加プロセスの把握

本章ではまず13公園全体の空間的な特色、参加の概要を通観したうえで、参加プロセスにおける合意形成過程の内容が完成した空間デザインおよびコンセプトの考案や変更に大きく影響を及ぼしたと考えられる3公園について詳述していく。

(1)全公園の立地環境および空間的特色について

13公園の立地環境ならびに整備前の公園の特徴について整理した結果を表-2に示す。これより、参加型で作られた13公園が立地する用途地域は、住居専用地域が6件、住居地域が2件、準工業地域が3件、近隣を含め商業地域が2件であった。一方、新設公園は13公園中4件であった。これら4公園の用地取得前の土地状況として、A公園は博多人形材料である粘土の捨て場跡、H公園は区役所分室の跡地、K公園は企業の社宅跡であり、水田であったL公園を除き、公園新設においては跡地利用を契機に行われるケースが多いものといえる。次に13公園中9件の再整備された公園の経緯としては「公園施設の老朽化」を全ての公園が掲げており、さら

に「見通しの悪さ(D、G、Iの3公園)」、「遊具の数の少なさ」に関するものがC、D、E、Jの4公園より挙げられている。その他の理由としては「ホームレスの占有で一般住民が利用しにくい(I公園)」、「世代ごとの遊び空間の分節ができていない(M公園)」等が見られた。地形や立地の特徴的なものとして、後に詳述するJ公園は公園の南側に「市楽池」というため池がありその東西を林が囲んでいる。さらにC公園は市の保存樹(楠)を境内に有す神社と隣接している等が挙げられる。

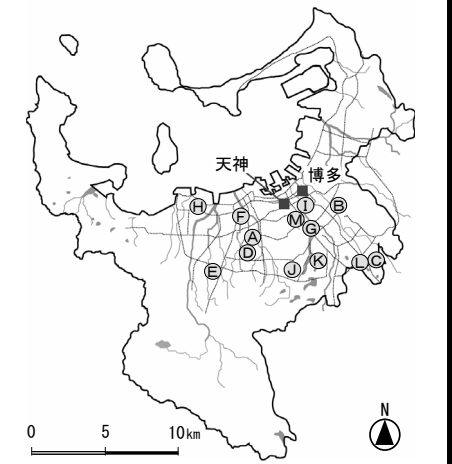
(2)各公園で行われた住民参加の概要と経費の概算状況

13公園で行われた住民参加の手法およびその概要等についてまとめたものを表-3に示す。これより、公園の完成年度が早いA～F公園(平成12～13年)までは、WS事務局として市役所の公園建設課が多く担当していることが分かる。これに対し、平成14年から近年までのG～M公園では同事務局が区のまちづくり企画課に移行している。さらにWSの開催数、従事期間もI～M公園の整備計画がそれ以前のA～F公園より多くなっている。これについてG～M公園は、福岡市の推進する市民参加促進施策のモデル事業となっていることも理由の一つとして挙げられるが、区の担当者(異動前は市の公園建設課に勤務)へのヒアリング調査より「市に比べ、より住民と近い存在にある区の担当課が整備計画に当たって、より意見聴取の手続きを重要視する傾向がある」との回答が得られている。参加の手法としてはWSによるものが大半であるが、回数が最も多いもので5年10ヶ月の期間で23回行ったJ公園、最も少ないものでF公園の20日間で3回であった。

次に、設計業者等によって作成された各公園の報告書から概算事業費をまとめた結果を表-4に示す。これより、敷地造成費用や施設整備費といった直接工事費は公園面積の大きさにはほぼ比例していることが分かる。特筆すべきは諸経費が、直接工事費に対する割合(13公園では45～80%)の設定で計上されている点である。さらにこれら諸経費の割合の高さはWSの開催数と正の比例関係にあることも看取できよう。しかし、一例としてD公園とG公園はほぼ同面積の公園であるのに対し、その整備内容の違いから、直接工事費はD公園の方が1500万円高く、直接工事費に対する50%の諸経費(WS:3回/1ヶ月11日、参加延べ人数36名)は、G公園(WS:4回/3ヶ月8日、参加延べ人数137名)の諸経費(直接工事費の70%)よりも高い。

無論、参加に関わる出費は諸経費の一部と考えられるものの、WSなどに充てられる経費の概算に関しては、参加の中身ではなく、それを参照しながらも直接工事費に対する割合で総概算事業費の算定が行われていることが明らかとなった。さらに、区担当者へのヒアリング調査より、公園整備事業の発注前に、WSの

表-2 13公園の立地環境および整備前の空間的特色

公園名 【完成年度・整備内容】	A公園(H12・新設)	B公園(H12・再整備)	C公園(H13・再整備)	D公園(H13・再整備)	E公園(H13・再整備)
概観					
面積・公園種別	約1300㎡・街区公園	6,505㎡・街区公園	2,051㎡・街区公園	2,138㎡・街区公園	1,609㎡・街区公園
用途地域・周辺土地利用などの立地環境	第一種中高層住居専用地域。公園は住宅地に囲まれ、沿道を挟み北側に寺、保育園がある。沿道の幅は約5m弱で交通量は多い。	準工業地域。周辺には工場や事業所のほか低層住宅が見られ、北側には高層マンション、東側には商店が立地。	準工業地域。周辺は第二種住居地域。周辺一帯は戸建住宅が多く、隣接する神社の鎮守の森と思われる緑地が存在。	第一種低層住居・中高層住居専用地域。周辺には大規模な団地があり、新旧の戸建住宅が混在し、中高層マンションは見られない。	第一種低層住居専用地域。周辺は戸建住宅が大半を占め、住宅街の中央に位置する。
整備前の公園の特色	公園計画地の形状は長方形。東と西側の地上面は約2.5mの高低差があり、東側に約25×30m(600㎡)、西側に約18×20m(360㎡)の平坦地。	敷地内には放水路が通っており、敷地を北側と南側に二分。荒れた地表面とベンチや遊具の老朽化が著しく、利用者が少ない。照明も暗く、排水も悪い。一方で地元住民による花壇づくりや夏祭りも催されている。	バレー・フットベースボール等の練習や夏祭りが行われ地域活動の場として機能。しかし遊具の老朽化等により子供の利用率の低さが問題視。また東側、神社と隣接し、市が保存樹として指定する楠がある	地元子供たちの野球や高齢者のゲートボール場として使用。しかし水はけが悪く雨天後は水浸し。遊具の老朽化や敷地西側奥は昼間でも薄暗く見通しが悪い。	敷地は道路を挟み南北に二分。南側の敷地内には集会所がある。北側ではバスケットボールなどの練習や夏祭りが行われ、南側は犬の散歩、休息に利用。施設の老朽化と遊具の少なさが問題視。
公園名 【完成年度・整備内容】	F公園(H13・再整備)	G公園(H14・再整備)	H公園(H14・新設)	I公園(H15・再整備)	J公園(H15・再整備)
概観					
面積・公園種別	990㎡・街区公園	2,122㎡・街区公園	1,098㎡・街区公園	5,102㎡・街区公園	15,932㎡・近隣公園
用途地域・周辺土地利用などの立地環境	第二種中高層住居専用地域。大学寮やマンション等が戸建住宅と混在する閑静な住宅地。	準工業地域。周辺建物は木造と非木造が混在し、木造は築25年以上のものが大半。近年マンション建設が進み町並みの変化が大きい。	商業地域。周辺は住宅地であり旧国道沿いに低層部を店舗とするマンション。西側の都市計画道路拡幅工事に伴いマンション建設予定。	近隣商業地域。東側道路沿いには事業所ビルやマンションが点在。しかし全体的に木造密集地であり、防災拠点としての意義が高い。	第二種中高層住居専用地域。周辺には古くからの戸建住宅と新興のマンションが混在し、低層と中高層の住宅が点在している。
整備前の公園の特色	元々焼却場の跡地を利用した児童公園。隣接して区民プール、保育所が立地。周辺宅地より地盤面が高く、水害時の避難場所としての位置づけ。しかし施設の老朽化が目立ち、特に地表面や植栽の荒廃が進む。	計画地は扇形の形状で起伏のない平坦な地形。桜や銀杏などが存在する一方、樹木の繁茂によって園内の見通しが阻害。花見やラジオ体操、廃品回収など住民の活動拠点であるが遊具等の施設が老朽化。	計画地は南北に細長い台形であり、西側、北側を幹線道路と面する交差点付近に立地。地下鉄駅と住宅地を結ぶ通勤通学ルート沿いに位置し、利用も多いが、車の量も多い。	「アフリカ」をテーマにヤシの木や動物の遊具が存在。施設の老朽化と樹木の繁茂によって見通しの悪さが問題。またホームレスの占有によって一般住民が利用しにくいなどの苦情が出る。	東西に林があり、これに囲まれて公園内に洪水調整池。池の周りや林の中を歩け、自然要素の多い場所。グラウンドと遊具があるが、ブランコ、砂場、鉄棒と種類が少なく、ベンチも老朽化。
公園名 【完成年度・整備内容】	K公園(H16・新設)	L公園(H16・新設)	M公園(H16・再整備)	13公園の位置関係	
概観					
面積・公園種別	1,397㎡・街区公園	1,500㎡・街区公園	2,872㎡・街区公園		
用途地域・周辺土地利用などの立地環境	第一種低層住居専用地域。周辺は閑静な住宅地。道を挟んで北側に幼稚園がある。	第一種住居地域。農地転用により高層マンション、人口増加。周辺に公園も多いが幹線道路や鉄道によって地域分断、相互利用少。	第二種住居地域。周辺を鉄道、二本の幹線道路、二級河川に囲まれ、都心近郊の交通の便がよい住宅地。マンション建設が進む。		
整備前の公園の特色	元々企業の社宅跡地を公園用地として取得。敷地は正方形をしており北と西側に市道が通る。当校区は市民一人あたりの公園面積が全市平均と比べ少ない。	東西にのびる長方形で西側に7.5mの道路、道路面から0.6m下がった水田で、整備に際しては盛土造成を必要。隣接して農業用水路があり、集合住宅の外周壁と面す。	平坦地でカメ山遊具を中心に土の広場。狭さから主にドッチボール程度の遊び。小学生と幼児が同じ所で遊ぶため事故。敷地内には老人憩いの家あり。神社、小学校と隣接。		

回数や内容など、参加に関わる条件がある程度区によって提示され、これに対し設計業者がWS手続きを含む設計委託料を見積もり、そのうえで受注金額が決められていることも回答として得ている。13公園においても、当初受注した金額が変更されるケースはほとんどなく、WSや参加に関わる機会、内容の濃さが経費計上や変更にはほとんど無関係である実態が見出される。

(3) 各公園ごとに見る参加プロセスの内容と特徴

本調査で対象とした13公園において、公園ごとに合意形成プロセスの内容と特徴について整理した結果を示す。ここでは紙幅の関係から、前述したように13公園のうち、参加プロセスでの合意形成の内容が公園の空間構成や遊具等の具体的なデザイン方針に大きく影響を及ぼしたと考えられるC、H、Jの3公園について詳しく見ていく。

表-3 各公園における参加の概要

公園名	A公園	B公園	C公園	D公園	E公園
参加の手法 (回数/期間)	アンケート＋説明会 (2回/約6ヶ月)	ワークショップ (3回/2ヶ月25日)	ワークショップ (3回/2ヶ月)	ワークショップ (3回/1ヶ月11日)	ワークショップ (3回/2ヶ月8日)
参加の概要	アンケートの内容 ①どんな公園が欲しいか ②好きな公園はどこなところ ③公園で何をしたいか ④公園の管理について その後、隣組長説明会、アンケート結果を基に素案3案作成、回覧板公表・アンケート、素案1案をもとに地元説明会	①第一回WS(H10.2.21) 他公園事例紹介、計画案イメージを作成 ②第二回WS(H10.3.28) 事務局作成たたき台(3案)評価、施設検討 ③第三回WS(H10.5.16) 基本設計案、模型への意見、スケジュール検討	①第一回WS(H11.7.18) 現況視察、自由意見発表、計画案イメージ作成 ②第二回WS(H11.9.5) 事務局たたき台(2案)評価、合意形成 ③第三回WS(H11.9.18) 基本設計案、模型への意見、スケジュール検討	①第一回WS(H11.9.12) 現況視察、自由意見発表、計画案イメージ作成 ②第二回WS(H11.10.3) 事務局たたき台(3案)評価、1案に合意形成 ③第三回WS(H11.10.23) 基本案、模型への意見、今後の公園管理検討	①第一回WS(H11.12.12) 現況視察、自由意見発表、計画案イメージ作成 ②第二回WS(H12.1.30) 事務局たたき台(3案)評価、1案に合意形成 ③第三回WS(H12.2.20) 基本案、模型への意見、今後のスケジュール検討
WS事務局	市 公園建設課	市 都市計画課	市 都市計画課	市 公園建設課	市 公園建設課
WS参加メンバー構成/ 延べ人数	当該地区に460部配布、270部の回答	当該地区700世帯を対象に住民へ案内状/約80名	当該地区600世帯を対象に住民へ案内状、回覧呼びかけ/約100名	当該地区町内会役員を中心に会長が人選(主に役員)/36名	当該地区町内会長呼びかけで募集/62名

公園名	F公園	G公園	H公園	I公園	J公園
参加の手法 (回数/期間)	ワークショップ (3回/20日間)	ワークショップ (4回/3ヶ月8日)	ワークショップ(＋発表会) (5回/4ヶ月18日)	ワークショップ(＋発表会) (5回/7ヶ月19日)	ワークショップ (23回/5年10ヶ月)
参加の概要	①第一回WS(H11.10.30) 公園にほしいもの等、意見把握、公園イメージ描く ②第二回WS(H11.11.6) 事務局たたき台(2案)評価、1案に合意形成 ③第三回WS(H11.11.20) 最終案評価、現地でスケールと施設配置確認	①第一回WS(H12.12.3) 公園クイズ、まちの成り立ち勉強会、現況視察 ②第二回WS(H13.1.28) 他事例紹介、公園作りのイメージ、アイデア提出 ③第三回WS(H13.2.17) 事務局たたき台(3案)評価、修正意見・合意形成 ④第四回WS(H13.3.11) 最終案評価、現地でスケール確認、スケジュール検討	①第一回WS(H13.6.23) 公園クイズ、現場確認、空間イメージ抽出 ②第二回WS(H13.8.4) イメージ共有、図面作成、小学生プラン発表など ③第三回WS(H13.9.1) 事務局たたき台(3案)評価、修正意見・合意形成 ④第四回WS(H13.9.29) 最終案評価、現地で確認、施設・利用のチェック ⑤発表会(H13.11.11)決定事項確認、愛称決め	①第一回WS(H13.8.4) 現況視察、良い点、悪い点、気づいた点を発表 ②第二回WS(H13.9.8) 地域の歴史をスライド確認、他事例紹介、計画案イメージ作成 ③第三回WS(H13.10.20) 地元小学生案発表、たたき台(3案)評価、1案に合意形成 ④第四回WS(H13.11.10) 基本設計案発表、合意形成 ⑤発表会(H14.3.23) 実施設計確認	①WSラウンド1(H9.1～H10.1)基本構想の検討(4) ②WSラウンド2(H11.4～H11.8)基本設計の検討(4) ③WSラウンド3(H11.9～H12.3)池部工事に参加(3) ④WSラウンド4(H12.7～H13.3)施設等実施設計案の検討(7) ⑤工事後WSラウンド1(H13.9～H14.3)工事後の見直し(3) ⑥工事後WSラウンド2(H14.6～H14.10)工事後の見直し(最終2)※()はWS開催数
WS事務局	市 公園建設課	市公園建設課、 区まちづくり企画課	市公園建設、維持管理課、 区まちづくり企画課	区まちづくり企画課	区まちづくり企画課
WS参加メンバー構成/ 参加延べ人数	当該地区町内会を通じて参加者募集/42名	自治会、町内会、子供会、公園愛護会、一般/137名	自治会、商店会、幼稚園関係者、校区一般住民(半数)/136名	当該地区住民を中心に公民館便りで公募/139名	町内会役員、周辺住民(公園市民グループ)/約330名

公園名	K公園	L公園	M公園
参加の手法 (回数/期間)	ワークショップ (4回/2ヶ月24日)	ワークショップ (4回/4ヶ月)	ワークショップ (4回/2ヶ月24日)
参加の概要	①第一回WS(H13.12.9) 現場視察、敷地特性把握 ②第二回WS(H14.1.14) 他事例紹介、公園作りのイメージ、アイデア提出 ③第三回WS(H14.2.3) 事務局たたき台(1案)評価、修正意見・合意形成 ④第四回WS(H14.3.3) 合意案最終確認、現地で議論後再度合意、完成後の運営、管理面の検討	①第一回WS(H14.11.16) 近くの公園を視察、公園の良い・悪い点発表 ②第二回WS(H14.12.14) 公園作りのアイデア提出、子供の遊具模型作成 ③第三回WS(H15.1.25) 施設配置、遊具広場検討 ④第四回WS(H15.3.15) 最終案評価、シンボルツリー決定、遊具案まとめ、維持活用について検討	①第一回WS(H13.12.22) 他公園事例紹介、現況視察、自由意見発表 ②第二回WS(H14.1.19) イメージのキーワード出し、案の作成 ③第三回WS(H14.2.16) 事務局たたき台(3案)評価、合意形成、施設配置 ④第四回WS(H14.3.16) 基本設計案・模型への意見、修正、管理活用方法について検討
WS事務局	区まちづくり企画課	区まちづくり企画課	区まちづくり企画課
WS参加メンバー構成/ 参加延べ人数	自治・町内会、育児サークル、幼稚園、近隣一般住民にチラシ協力依頼/112名	当該地区住民を中心に公募/94名	市政だより、町内会の呼びかけで募集/124名

表-4 各公園の概算事業費と内訳			
公園名	総概算 事業費	直接 工事費	諸経費 (直接工事費に 対する割合)
A公園	20136	20136	計上なし
B公園	104998	69999	34999(50%)
C公園	41232	27488	13744(50%)
D公園	45877	30585	15292(50%)
E公園	35961	23974	11987(50%)
F公園	33504	22006	9902(45%)
G公園	30000	17650	12350(70%)
H公園	29383	16324	13059(80%)
I公園	115249	64027	51222(80%)
L公園	33950	9700	7280(75%)
M公園	37820	23638	14182(60%)

J,K公園は資料無し (千円)

a) C公園

まず、前述したようにC公園は、立地環境として公園東側に神社を有し、市の保存樹指定を受けた楠を擁す鎮守の森と隣接していることが挙げられる。表-5にC公園の計画・設計過程で行われたWSの概要を示す。第一回WSでは、現地に於て敷地を再確認したうえで、グループ毎に公園の「好きなところ」「嫌いなところ」等を現況平面図上に書き出し、発表している。ここでは現状の公園に潜在する魅力や問題点について参加者各々の意見を整理し、かつ参加者同士が互いに意識を共有するプロセス

がなされたことと位置づけられる。さらにWS中では他公園事例の紹介が事務局より行われ、再整備公園の計画イメージを具体化する作業が行われている。ここではどのような公園にしたいかについて予め準備した「目標カード」を参加者各自に3枚ずつ選んでもらい、そこから話し合いによってグループごとに目標を3つに絞り込む「グループ目標」の決定を行っている。これを踏まえ、舗装に見立てた色紙や木、遊具などのパーツを組み合わせ、現況平面図上に「起こし絵」として表現し、各自公園づくりに関する目標像を共有した経緯がうかがえる。

表-5 C公園でのWSの概要

公園名	C公園
WS開催日 目標と 活動内容	第一回WS(H11.7.18)【基本方針の検討】 ①公園現況ウォッチング、自由意見発表 ②計画案イメージ作成
	第二回WS(H11.9.5)【施設内容の検討】 ①事務局まとめのたたき台(2案)発表 ②各班改良案発表 ③個々の施設検討(400万円分遊具選定) ④旗揚げアンケート等により1案に合意形成
	第三回WS(H11.9.18)【基本プランまとめ】 ①基本設計案・模型への意見、改良 ②整備スケジュール検討
	整備期間 H12～13年度 概算費用 41,232(千円)

表-6 C公園のWSにおける住民意見(一部)

公園名	C公園
WS回: 活動内容 「住民の主 な意見」	第一回WS:敷地の見直し、新公園の空間イメージ抽出 「神社に連続した緑の豊かな公園」 「バレーボール等のボール遊びが可能な公園」
	第二回WS:事務局作成のたたき台図面2案発表、住民が評価 「神社に境内にボールが当たらないようにグラウンドを公園北側とし、 ボール遊びができるようにフェンスで囲む」 「神社との間は開放し、自由に行き来できるようにする」
	第三回WS:最終決定図面・模型確認が全体討議形式で行われる 「広場周りのフェンスはフットベースボールができる高さ3mとする」

表-6にWS中に参加住民より出された意見の主な内容を示す。これより、基本方針を検討した第一回および第二回WSにおいて、神社と公園とのつながりを重視する意見が出されていたことが分かる。しかし、これに対し、施設内容の具体的な議論に及んだ第二回および第三回WSでは、子供達の遊ぶボールが神社に飛び出すのを防ぐため、神社との境界にフェンスを設置する旨の意見が出され、最終案に繋がっている。

b) H公園

一方、新設公園であるH公園は表-2からも分かるように商業地域に立地し、西・北側は幹線道路の歩道に接する南北に延びた長い台形の敷地となっている。表-7にH公園のWSのプログラムの概要を示す。第一回WSではまず自分達の暮らす街の歴史や公園づくりの基礎知識を学ぶために「わがまち公園クイズ」や地図による現状確認の作業が行われている。さらにここでは予算や管理など住民WSで検討できる範囲について、予め確認する内容も含まれている。次に建設予定地の現地調査を行った後、設定した4課題(①ほっとする場所、②待ち合わせする場所、③子供を遊ばせる場所、④シンボルを立てる場所)を図面に落とし、利用イメージを固めている。表-8に住民意見の一部を示す。これより、第一回WSでは「子供は遊具に対する期待が大きい」「広場で走り回ような遊びのイメージはほとんどない」「ボール遊びへの安全の配慮」「自然豊か」といった公園のイメージが期待されている事が分かる。これに対し、基本方針を検討した第二回WSにおいて遊具等に対し「カラフルなものが欲しい」「視覚的印象に残るものが欲しい」との意見が出ていることが分かる。ここでは地元小学生が授業の一環で作成した公園プラン(平面図)が壁に張り出され、代表として参加した小学校教諭の説明によって、小学生達の意見をWS参加者が確認する内容となってい

表-7 H公園でのWSの概要

公園名	H公園
WS開催日 目標と 活動内容	第一回WS(H13.6.23)【現状把握】 ①わがまち公園クイズ ②現場確認、空間イメージ抽出
	第二回WS(H13.8.4)【基本方針の検討】 ①利用イメージを共有しながら図面に落とし ②小学生プラン発表、利用イメージ絞り込み
	第三回WS(H13.9.1)【公園計画案検討】 ①前回案に基づく事務局作成たたき台(3案)説明 ②たたき台の評価 ③修正案作成に向けての意見交換とまとめ ④施設や利用に関して旗揚げ・チェック
	第四回WS(H13.9.29)【基本プランまとめ】 ①事務局まとめ最終案提示、確認 ②現地確認、最終チェック ③管理面の検討
	発表会WS(H13.11.11)【最終計画案確認】 ①最終計画案発表、決定事項確認 ②公園の愛称決め
	整備期間 H14年度 概算費用 29,383(千円)

表-8 H公園でのWSにおける住民意見(一部)

公園名	H公園
WS回: 活動内容 「住民の主 な意見」	第一回WS:空間イメージ抽出 「子供は遊具に対する期待が大きい」「自然が豊か」 「広場で遊びまわるとような遊びのイメージはほぼない」 「ボール遊びへの安全配慮」「お年寄りが何となく訪れる場所」
	第二回WS:地元小学生が授業の一環で作成したプランの発表 「フェンスなど安全面に対する要望」「カラフルなもの」 「視覚的印象に残るもの」
	第三回WS:事務局作成のたたき台3案発表、住民が評価 「カメ型の遊具がほしい」
	第四回WS:現地に遊具の大きさ、盛り土の高さ、 施設配置やフェンス高さのシミュレーション 「カメ型遊具の直径は7m程度」
	発表会WS:最終決定図面の確認が全体討議形式で行われる ・公園案の合意がとられる

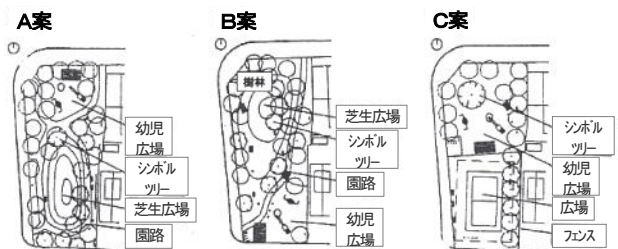


図-1 H公園の第三回WSで示された設計案たたき台3案

る。これを受け第三回WSでは、設計案のたたき台としてA～Cの3案が提示されているが(図-1)、ここで「カメ型の遊具を設置する」案が浮上し、合意に至っている。これは、ある住民が「私はカメ型の遊具に深い思い出があるので、この公園にも是非カメ型の遊具を設置し、子供達の思い出に残るようにしたい」との発言に他の参加住民が賛同したものである。

c) J公園

最後にJ公園の合形成プロセスでは、5年以上の期間をかけ、全6ラウンドに分かれた計23回のWSが行われている(表-9)。J公園のWSでは、話し合いの随所でスライド等を用いた公園デザインの先進事例が紹介され、イメージの共有が図られている。特に第二回WSでは、当初のプログラム予定にはない議論が発生している。それは公園の整備方針に関して、前述したJ公園の自然をできるだけ残し池も埋め立てないとする意見と、池はある程度埋め立てて洪水調整機能を重視するという

表-9 J公園でのWSの概要

公園名	J公園
WSの開催時期 目標と概要	WSラウンド1 (H9.1～H10.1)【基本構想の検討】 第一回:現地踏査 第二回:基本方針・イメージの検討 第三回:たたき台(3案)を基に検討 第四回:最終案確認、今後の課題整理
	WSラウンド2 (H11.4～H11.8)【基本設計の検討】 第一回:基本計画確認、変更案の検討 第二回:具体的イメージの検討 第三回:たたき台を基に検討 第四回:細部の検討、最終案確認
	WSラウンド3 (H11.9～H12.3)【池部工事への参加】 第一回:実施設計説明 第二回:工事説明会、貴重樹移植 第三回:貴重樹移植
	WSラウンド4 (H12.7～H13.3)【施設等実施設計案の検討】 第一回:工事説明会 第二回:親子アンケート 第三回:子供WS 第四回:基本設計の見直し 第五回:改修案決定 第六回:改修案決定(続き) 第七回:工事説明会、貴重樹移植
	工事後WSラウンド1 (H13.9～H14.3)【工事の見直し】 第一回:工事後の反省 第二回:工事説明会、貴重樹移植 第三回:しがら(六存林への人の侵入阻止のための設備)組み
	工事後WSラウンド2 (H14.6～H14.10)【工事の見直し(最終)】 第一回:手直し工事の説明 第二回:工事後の反省 (全6ラウンド合計WS23回開催)
整備期間	H12～15年度

2つの意見が参加者より出され、衝突する議論に至っている。さらに事務局が準備したプログラムの作業も多く、一部の参加住民には負担が感じられた場面もあったとされる。またファシリテーター等に対する市の説明不足から「既に役所では整備の青写真ができあがっているのではないか」という一部の参加住民の不信感を生じさせていた。しかし、これら予想外の議論に時間が割かれたことで、結果的には、参加住民同士や参加住民と事務局との間の風通しが良くなり、後の活発な議論を円滑にしたとの記録が残されている。さらに基本設計の検討では、たたき台が3案発表された後、「池・湿地」「水辺の園路」について、粘土で作られた1/200の池・湿地部分の現況模型が用意されている。その後、池部の安全対策について議論が続けられているが、フェンス設置派と不要派に分かれて結論が出ず、次回WS以降に持ち越されるなどのプログラム運用もなされている。また設計案の検討後は、現場において子供の安全指導を目的としたWSや実際の工事に住民が参加し、工事の見直しを目的としたWSも行っている。J公園ではこれら一連のWSを通して、公園管理を巡る主体的・継続的に関わる住民団体(J公園かたろう会)の結成も促されている。

4. 完成した公園の空間デザインと合意形成プロセスとの関連性

本章では、対象事例13公園のデザインサーヴェイ・利用実態調査の結果として、13公園より把握された空間デザインの傾向や施設等の特徴について述べ、前述した3公園を例示しながら合意形成プロセスとの関連性について詳細な考察を行う。

(1)参加型13公園に見られる空間デザインの傾向

まず13公園に見られる空間デザインの傾向として、ゾーニングの明確な空間構成が多く看取された。これはWS

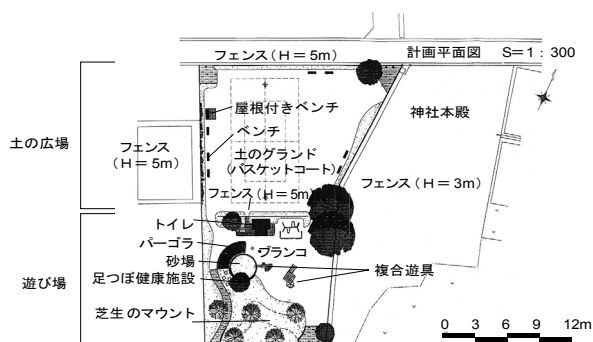


図-2 C公園平面図

における参加住民の公園使用に対する意見等を反映した結果と推察される。特に利用者として児童等を想定した「遊び場」の空間として、球技やイベントなど多目的な利用を想定した「広場ゾーン(グラウンド)」と、ジャングルジムやブランコ等の存在する「遊具ゾーン」に大別され、それらの複合した空間構成がほとんどの公園から抽出された。さらに「遊び場ゾーン」と隣接する一般道路や他ゾーン等との境界部にはフェンスが設置されている公園が多く、特に参加の期間約2ヶ月以内でWS回数が3回のC, D, E, Fの4公園で3mを超す複数のフェンスが設置されていた。反対に4ヶ月半を超える期間でWSを5回以上開催したH, I, J公園では道路との境界部に身長を超す高いフェンスなどは見られなかった。加えて、13公園中全ての公園で滑り台等の遊具が設置されており、J公園の木製遊具を除き、そのほとんどが原色を配した色鮮やかなスチール製の遊具が存在していた。

(2)空間デザインと合意形成プロセスとの関連性

ここではC公園, H公園, J公園のデザイン・サーヴェイの結果を詳述し、考察を進める。まず当初神社とのつながりを重視していたC公園であるが、空間構成としてバスケットやバレーボール等のできる公園北側の「土の広場ゾーン」、遊具やトイレ、芝生の広場などから成る公園南側「遊び場ゾーン」の2つのエリアに分割されているのがわかる(図-2)。さらにC公園の空間的特徴として「土の広場ゾーン」の周囲を囲む高さ3～5mのフェンスが設置されている様子がうかがえる(表-10, 写真-1)。C公園では、第一回WSにおいて「神社との一体的な空間」が目指され、第二回WSでは事務局が提案した「たたき台」に対する合意形成の際、全4グループ中、2グループはA案、1グループはB案、残る1グループはA案のゾーニングを南北逆にした新案の提案を行っている(図-3)。ここでは旗揚げアンケートの手法を用いながら一案への合意形成を図り、最終的に上記新案が採用された。しかし、新案では隣接する神社の本殿にグラウンドが近接してしまい、子ども達の遊ぶボールが境内に入るのを防ぐため、前述したグラウンドと神社本殿との間に高さ3mのフェンスを設置するよう住民から

表-10 C公園竣工後の空間的特徴

公園名	C公園
空間的特徴	・バスケットコート(かなり使われている様子) ・神社境内は木々が豊富 ・公園入口(6cmの段差) ・フェンスで神社と公園が分断(フェンスの色は茶褐色) ・北側広場の周りにフェンス(H=3m, 5m) ・バレーボール支柱立て(グラウンド部) ・周辺の住宅街静か
その他	・ウォールベンチ:1, 木製ベンチ:10 ・ゴミ箱設置数:1 ・遊具の総色相数:4 ・使用ルール, 規制などの看板:2

表-11 H公園竣工後の空間的特徴

公園名	H公園
空間的特徴	・黄色と水色で塗装された直径7mほどのカメ山遊具(滑り台, クライミングを併設) ・ウッドチップ舗装の園路(敷地北東側より南西側に抜ける) ・カメ山の周囲は砂場 ・入り口部はノンステップ ・カメ山近くにパーゴラ ・幼児用のスプリング遊具 ・なだらかな芝生のマウンド(シンボルツリーとなるクスノキを植栽) ・民家との境界は高さ3mのフェンスと生け垣を施し修景 ・沿道部のフェンスは低い(H=約60cm) ・北西部の交差点の角部に公園の愛称名を記したモニュメント
その他	・石製ベンチ:5, 木製ベンチ:1, 木製長いす:1 ・ゴミ箱設置数:0 ・遊具の総色相数:4 ・使用ルール, 規制などの看板:5

提案があり、合意に至っている。これら一連の作業は、結果的に神社との一体的な公園デザインとは逆行する空間構成を招いてしまったものと解すことができる。基本方針が検討された第一回WSの成果が、新案に対する検討ならびにフェンスとは別の神社防護案(例えば植栽などフェンス以外のボール対策, あるいは公園内での住民の遊び方自体のルール徹底など)の検討に十分に結びつかなかったものと考えられる。

一方、カメ型遊具の設置が望まれていたH公園では、

公園北側の「シンボルツリーゾーン」、芝生の広がる中間部「憩い広場ゾーン」、公園南側の「遊具ゾーン」の3つのエリアより形成され(図-4)、「遊具ゾーン」において青と黄色で塗装されたカラフルな直径7mのカメ山遊具が出現している(表-11, 写真-2)。またH公園では住民から要望された「カラフルで視覚的印象に残るもの」「子供たちの思い出に残るカメ山遊具」というキーワードのみが、専門家による検討(派手な遊具が周囲の景観や自然豊かとの目標像と調和するか否か等)を十分踏まえずに、そのままの形・色彩で具象化されたものと推察される。

これに対して、計23回のWSを行ったJ公園では自然素材を基調とした遊具の設置が見られ、池部周辺に安全対策としてのフェンスの設置は見られない。また砂場に関しても他の公園で見られた犬の糞対策として設置されるフェンスの囲い込みもなく、斜面等、既存の地形を活かした砂場の形成が見られる(写真-3)。J公園ではWS中に遊具の設置についても議論されているが、当時、福岡市ではササクレによるケガの苦情が多く寄せられ、耐用年数が短い等の理由から、新しく整備・改修する公園には木製遊具の設置は推進されていなかった。しかし、前述した公園内の自然が多いという場所の特性や、WSプロセスの初期にスライドで上映された遊具に関する情報提供によって「J公園の環境と調和する木製遊具を」との強い要望が参加住民より出され続けた。その結果、

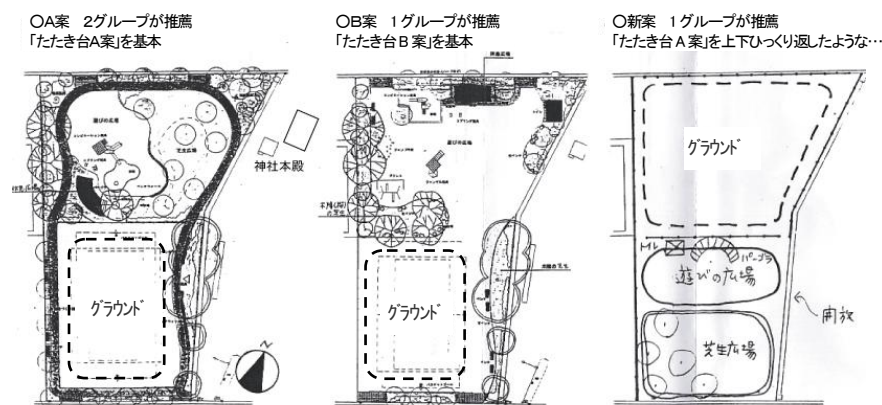


図-3 C公園のたたき台

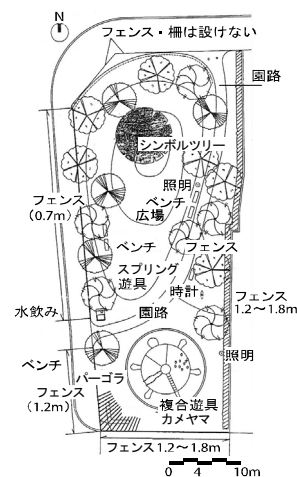


図-4 H公園平面図

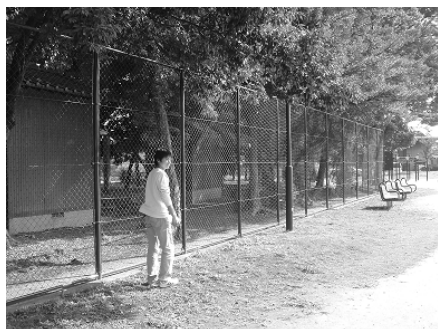


写真-1 公園神社間のフェンス



写真-2 カメ型遊具



写真-3 J公園の様子

手すり等はステンレスなどの素材を使用し、遊具の点検といった日常の管理に対して地元住民の協力が十分に得られることを条件に木製遊具の設置がなされている。長期にわたるWS中に促された園内の自然環境に対する住民の理解と専門家による情報提供（景観に関する意識啓発）によって、行政の方針が変更されるデザインに結びついたものといえる。

5. 住民参加型空間整備事業の課題について

(1) 時間・予算的制約と安易なハード型解決策の再考

参加型公園13事例を対象に合意形成プロセスと空間デザインとの関連性の検討より、参加のプロセスの質は、I. 公園内での事故を防ぐ安全対策、II. 遊具などのパーク・ファニチャーのデザインに顕著に表出する傾向が抽出される（図-5）。これは、13公園の参加プロセス中、議題に挙げた共通の内容として上記二点が挙げられ、それらの配置方法や造形的な質の違いが専門家と住民におけるやりとりの質的な差と密接な関係にあることが看取されたことによる。特に本調査結果より、公園ごとの安全対策や遊具設置に関する議論の中で、周辺の景観に対する配慮や公園内での事故防止に対する意識の醸成を踏まえ、即座に派手な遊具や高いフェンスの設置が合意に至るケースが多く見られた。公園づくりにおいて「安全対策」や「遊具のデザイン」といった要素は、住民にとって目に付きやすく、また特に関心の高い項目といえる。これに対し13公園中、多くの合意形成プロセスにおいて「フェンス」による「ハード」の安全策やカラフルな遊具設置といった、住民に「分かりやすい」解決策が安易に選択された傾向が見出される。特にフェンスの高さや配置に関しては、第一回WSから最終回までの期間が短く、WSの開催数が少ないほど、上記、住民意見への対応が明示的な方策・デザインに繋がる傾向が指摘できる。合意形成プロセスにおいて、議論不足による安易なハード整備を防ぐためにも、住民の安全に対する認識の向上、つまり人が危険性を想定でき、自らの行動によって事故を防げる可能性を持つ「リスク」と、人が危険性を想定できず、対策を施すことで事故を未然に防ぐべき「ハザード」の違いを認識する必要がある¹¹⁾。

前述したJ公園では、フェンスの設置に頼らずに、安全対策を議論するプログラムを特別に用意するなど、利用者の意識・行動に直接訴える、いわばソフト的な合意形成プロセスが見受けられた。さらにデザイン・景観に対する意識醸成、公園の利用・管理に対して継続的な携わりの持てる主体づくりを、WSや参加のプログラムに積極的に組み込ませることも重要であろう。「カラフル＝子供が喜ぶ」といった固定観念に縛られず、空間や遊具自体の構造や造形の可能性を探る姿勢も必要といえる。無論、カラフルな遊具全てが悪いわけではない。留意す

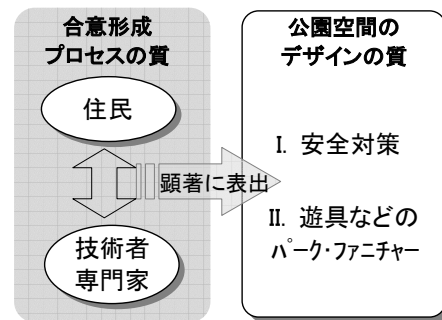


図-5 参加の合意形成プロセスと公園空間デザインとの質的關係

べきは、空間を圧倒的に支配してしまう色づかいや具象のデザインが存在することで、本来そこにある空間自体のおもしろさや場所性を人々が読み取りにくくなってしまいう危険性である¹²⁾。あくまでも公園の主役は遊具ではなく、そこで遊ぶ子どもたちや憩う住民であることを再認識する必要があるだろう。特に、前述した専門家と住民との議論において、公園デザインに対する安易な住民意見によって、デザインの質的低下を招くと考えられる場合には、専門家が自らの責任として意見や知見を主張すべき姿勢も求められよう。そうした文脈において、発注時に決められる事業期間や年度を基準とする予算の制約（WSをやればやるほど儲けが減っていく等）は事業に携わる実務技術者と住民との腰を据えた対話を阻害する要因として抽出され、再検討すべき課題と考えられる。

(2) 参加型事業の質的担保に関わる費用と制度的支援策

本考察より、各公園の面積や資源、事業期間が違うものの、詳述したC公園、H公園とJ公園には共通する参加プログラムの成果があった一方で、作り手と住民との議論の量や質的な差も見受けられる。しかし、それは時間さえかければ良いものができるという単純な指摘ではない。J公園では、市の方針として禁止されていた木材遊具の使用について、維持管理に関わる住民側のルールを作成したうえで、遊具自体の部位にまで及ぶデザイン提案を専門家とともに導き出していた。限られた時間の中でしか対話できない前提条件をいかに捉えるか、さらに空間デザインのあらゆる可能性を追求し、必要ならば当初の計画にない対話の時間を確保する実務技術者、専門家の姿勢も求められよう。

そのような住民参加の普及には、参加のプロセスを充実させるための期間と資金の柔軟性を確保する工夫が必要であることは言うまでもない。3章での事業費内訳に対する調査結果より、参加内容と経費計上との無関係な実態が把握されたことは既に述べた。前述してきた専門家の姿勢を支援するためにも、住民参加の手続的な質が正当に費用として計上できる項目の提案とその設定内容は急務の課題といえよう。さらに住民参加への取り組みを介すなかで成果物としてのデザインの質が評価された

技術者に対しては、より受注の可能性が向上するインセンティブを持たせるなど、上記工夫をカバーする仕組みの導入も考えられる。

(3) 合意形成プロセス初期の目標設定と継続的共有

しかし、現状では構想段階から施工までの期間が限定されている事業形態が大半であり、上記工夫や仕組み導入に繋がる方策を地道に積み上げていくより他にない。C公園において参加のプロセスを経た結果、当初目指していた公園像とかけ離れた空間構成やデザインが出現したことは既に述べた。コミュニティ・デザイナーであるHesterは参加のプロセスとして12ステップを紹介し、「場所を知る (Place Knowing)」の工程として「コミュニティの話を聴く (Listening)」に続く2ndステップに「目標を設定する (Setting Goals)」を挙げている¹³⁾。参加型整備事業にまずもって留意すべき作業として、合意形成プロセス初期の目標設定とその設定された目標像の継続的な共有が改めて課題としてあげられよう。

6. おわりに

本研究で得られた成果として以下が挙げられる。

- 1) 福岡市における参加型13公園の合意形成プロセスと完成した空間デザインの質的事後評価を行い、それら結果の整理と、参加の質的評価が事業費用として反映されにくい現状を明らかにした。
- 2) 公園づくりにおいて合意形成プロセスの質はI. 公園内での事故を防ぐ安全対策、II. 遊具などのパーク・ファニチャーのデザインに顕著な違いとして表出する傾向があることを明らかにした。
- 3) 事業期間や資金制約を背景として、住民に分かりやすいハード整備が合意形成の解決策として提案されやすいこと、さらに住民の安全性や景観に対する意識醸成を促すソフト的な合意形成プログラムの重要性を示唆した。
- 4) 参加プロセスを充実させるための費用項目と制度的

支援策の必要性を指摘したうえで、現状の留意すべき作業として参加の初期プロセスにおける目標像設定とその継続的な共有を再認識すべき課題として示唆した。

参考文献

- 1) 齋藤朝、土肥真人編著：環境と都市のデザイナー 表層を超える試み・参加と景観の交点から、学芸出版社、2004。
- 2) 阿部浩之・湯沢昭：ワークショップにおける合意形成プロセス評価、第36回日本都市計画学会学術論文研究集、pp.55-60、2001。
- 3) 天野裕・土肥真人：岡崎市奈良井公園改修の参加型プロセスにみるデザイン上の特性に関する考察、ランドスケープ研究発表論文集20、pp.731-734、2002。
- 4) 安仁屋宗太・福井恒明・篠原修：景観整備に関する事業の事後評価についての研究～浦安・境川をケーススタディとして～、景観・デザイン研究講演集No.1、pp.73-82、2005。
- 5) 後藤祐樹・篠原修：景観整備事業に関する複合的事後評価手法の研究～津和野川をケーススタディに～、景観・デザイン研究講演集、No2、pp137-146、2006。
- 6) 福井恒明・安藤義宗・兼和彦：利用者のコメントに基づく景観整備効果の分析、景観デザイン研究講演集No2、pp147-154、2006。
- 7) 篠原修監修：土木デザインの今+コラボレーション、VA建築画報301、建築画報社、pp9-10、2003
- 8) 篠原修編著・福井恒明：発注制度、景観用語辞典増補改訂版、彰国社、pp108-109、2007
- 9) 樋口明彦・吉原真理子・高尾忠志：既存コミュニティを貫通する地方幹線道路拡幅事業における住民参加に関する研究、土木計画学研究・論文集Vol.22,no.2、pp361-370、2005
- 10) 本調査の資料収集時点(平成17年8月)において、福岡市における参加型竣工公園は14公園あったが、そのうちホームレス問題の深刻な1公園に関して、市より対応協議中のため資料貸し出しならびに現地調査を延期してほしいとの申し出があり、本稿では13公園を対象に分析を進めている。
- 11) 国交省による「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」では「子どもの遊びにおける安全確保にあたっては子供の遊びに内在する危険性が遊びの価値の一つでもあることから、事故の回避能力を育む危険性あるいは子供が判断可能な危険性であるリスクと、事故につながる危険性あるいは子どもが判断不可能な危険性であるハザードとに区分する」としている。
- 12) 公園利用に対する実態調査(公園利用者数結果：総計170名)と利用者へのヒアリングより、H公園で遊ぶ子供達のカメ山遊具に対する存在感の大きさが把握された。一方で公園目標の一つとして掲げられていた自然豊かな公園北側、芝生広場の利用も高い結果が観測されたのに対し、それら芝生広場について言及するコメントはほとんど得られなかった。
- 13) Randolph T. Hester, JR.:Community Design Primer, The Ridge Times Press, p25, 1990 (邦訳：ランドルフ・T. ヘスター／土肥真人：まちづくりの方法と技術、現代企画室、1997)

合意形成プロセスと完成した空間デザインの質的事後評価にみる

住民参加型整備事業の課題に関する考察—福岡市における参加型13公園を事例として—

柴田 久**・西原敬人***・石橋知也****

本研究では、参加型で計画案が作成され、かつ竣工を見た公園整備事業を対象に、設計・計画段階の合意形成プロセスと完成した公園の空間デザインとの関連性から、参加に携わる実務技術者(専門家)に求められる姿勢や課題を検討した。結論として①参加の質的評価が事業費に反映されにくい実態を指摘し、②公園づくりの合意形成プロセスの質はI. 安全対策、II.遊具などのパーク・ファニチャーのデザインに顕著な違いとして表出する傾向があること、③資金・期間的制約から住民に分かりやすいハード整備が合意形成の解決策として提案されやすいこと、④参加の初期プロセスにおける目標像設定とその継続的共有を再認識すべき課題として指摘した。

The Issues of Participatory Project from the Relation of Decision Making Process and

Design Review in Finished Space -The Case of Participatory thirteen Parks in Fukuoka city- *

By Hisashi SHIBATA**・Takato NISHIHARA***・Tomoya ISHIBASHI****

The purpose of this paper is to consider issues of participatory project from the relation of decision making process and design review in finished space. The major findings include the followings. 1. Quality of citizen participation is not reflected easily in the cost of public works. 2. Quality of decision making process tends to appear remarkable difference in a safety measure and design of playground equipment. 3. It is easy for a comprehensible physical maintenance to be proposed as solutions in decision making. 4. The problems that should be recognized are setting goals in initial stage of participatory project and maintaining them.